

認知症研究 Up to Date

～14のリスク要因に基づく治療戦略～

日付：2025年2月7日（金）

時間：15:30 - 17:00

場所：創薬科学研究館 2階講義室（205）



白川 久志 博士

京都大学 大学院薬学研究科 生体機能解析学分野・准教授

超高齢社会のわが国では、2025年に認知症患者が約700万人に達し、65歳以上の高齢者の5人に1人が認知症を抱えると推計されており、その対策が急務となっている。2024年、『The Lancet』に14項目の認知症リスク要因が提示され、その多くは生活習慣病やその関連症候であったが、その提言に基づく基礎研究は遅々と進んでいない。我々は、生活習慣病に付随して惹起される「慢性脳低灌流」に注目し、両側総頸動脈狭窄（BCAS）マウスモデルを使用して認知症研究を行ってきた。その結果、ROSに反応する温度感受性Ca²⁺透過性カチオンチャネルであるTRPM2がミクログリアの活性化に関与し、白質傷害および認知機能障害を引き起こすこと（J Neurosci, 2018; Biochem Biophys Res Commun, 2019）、アストロサイトに発現する別のROS/温度感受性TRPチャネルであるTRPA1が白血病阻止因子（LIF）を産生し、白質傷害および認知機能障害を抑制することを発見した（Sci Adv, 2023）。これらの知見は、TRPM2阻害やTRPA1刺激が認知機能障害の治療に寄与する可能性を示している。

Host: 小坂田文隆 (ext. 6814)